

保育者養成におけるカウンセリング・マインドの育成

山下 京子

(2018年10月9日 受理)

The Development of Counseling Mind for Students of Early Childhood Education and Care

Kyoko YAMASHITA

Abstract

The Department of Child Education and Psychology at Hiroshima Jogakuin University was reorganized and converted to the Department of Child Education in 2018, drastically changing its curriculum. From the new curriculum, most clinical psychology subjects centering on counseling-related subjects were removed with some exceptions. This paper reviews and evaluates teaching practice in the course for “Counseling Jitsumushi” as one of the qualifications certified by Japan Association of University and College for Business Education and clarifies its problems. Related to the development of counseling mind in the course of Early Childhood Education and Care, this paper also analyzes the use of picture books, based on educational practices at other universities and Course of Study for Kindergarten approved by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. As a result, it reveals that enhancing students’ language activities is needed in all subjects of child care and education, to develop teachers with counseling mind and good communication skills in the new curriculum.

Keywords: counseling mind カウンセリング・マインド, Course of Study for Kindergarten 幼稚園教育要領, communication skills コミュニケーション能力, early childhood education and care 幼児教育・保育

1. はじめに

「幼稚園教育要領」(文部科学省, 2017), 「保育所保育指針」(厚生労働省, 2017), 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017)の3法令が同時に改訂(改定)された。伊崎(2018)¹⁾はその背景として, 高度な情報化社会による社会の変化の

スピードが速く予測不可能になる中で、子どもたちが社会で活躍する20年後にも通用する力の基礎を育むことが求められていることを挙げている。伊崎によると、今回の改訂は、幼稚園、保育所、認定こども園に共通する幼児教育の在り方を明確にするとともに、乳幼児期からの発達と学びの連続性や、小学校教育との接続の在り方が明示されたという。今日、国際的にも、幼児教育・保育の重要性が認識され、幼児教育・保育政策について、OECD(経済開発機構)やEU(欧州連合)などで活発に議論されている。山下(2018)²⁾は、保育の質に関する国際的動向や日本における取り組みを紹介し、保育者養成校の立場からどのように保育の質を考え、保育者養成カリキュラムに取り入れるかを検討した。その結果、保育の質評価尺度の項目を参照することで、担当授業科目との関連が明らかになること、保育の質の向上において指摘されることの多い「話し合う」ことの重要性を考慮し、知識伝達型の授業からグループワークやディスカッションなどのアクティブ・ラーニングを取り入れた授業に変更することを提案し、保育者養成におけるコミュニケーション能力の育成をねらいとした授業を提案している。

広島女学院大学幼児養育心理学科では、2018年度の改組に伴い、児童教育学科へと名称を変更し、カリキュラムも大幅な変更を行った。大きな変更点としては、公益社団法人日本心理学会による「認定心理士」や一般財団法人全国大学実務教育協会認定資格のひとつである「カウンセリング実務士」の心理系資格取得可能なカリキュラム編成をなくし、幼児教育や保育、児童教育について深く学ぶことのできる科目を新設したことである。児童教育学科では、2年次より幼稚園教諭免許、保育士資格の取得を目指す「保育コース」と、幼稚園・小学校教諭免許の取得を目指す「児童教育コース」に分かれることになった。幼児教育心理学科における臨床心理学系の選択科目「臨床心理学」「臨床心理学演習」「心理検査法Ⅰ」「心理検査法Ⅱ」、 「カウンセリング実務士」資格取得のための必修科目5科目のすべてが、新学科のカリキュラムではなくなり、臨床心理学系科目として新たに導入した科目は、選択科目「コミュニケーションの理論と実践」「教育アセスメント」の2科目となった。こうした改組によるカリキュラムの変更は、保育者養成課程において、どのような影響をもたらすのであろうか。本稿では、本学における従来の心理学系、中でも臨床心理学系の資格科目に焦点を当て、これまでの授業実践を振り返り、成果と課題を明らかにし、新しいカリキュラムにおいて必要とされる教育内容や教授法について検討することを目的とする。

2. 広島女学院大学における「カウンセリング実務士」資格教育課程の実践

「カウンセリング実務士」は、一般財団法人全国大学実務教育協会によるカウンセリング実務士資格認定規程に従い、認定された資格教育課程における規定の科目・単位を履修すること

で授与される認定資格である。広島女学院大学では、2004年度入学生から2017年度入学生まで、カウンセリング実務士の資格取得可能なカリキュラム編成を行った。資格取得可能な学科は、文学部人間・社会文化学科（2004年度から2006年度入学生）、文学部幼児教育心理学科（2007年度から2011年度入学生）、人間生活学部幼児教育心理学科（2012年度から2017年度入学生）であった。本学における認定された資格教育課程は、必修科目5科目10単位と選択科目24科目48単位（10科目20単位以上選択）であり、必修科目については年次指定した。すなわち、2年次前期「カウンセリング概論Ⅰ」、後期「カウンセリング概論Ⅱ」、3年次前期「カウンセリング演習Ⅰ」、後期「カウンセリング演習Ⅱ」、4年次前期「カウンセリング実習」であり、「カウンセリング実習」には学外実習を含んでいた。

「カウンセリング概論Ⅰ」「カウンセリング概論Ⅱ」「カウンセリング演習Ⅰ」「カウンセリング演習Ⅱ」「カウンセリング実習」のシラバスの概要を、それぞれ、表1、表2、表3、表4、表5に示した。

「カウンセリング実習」参加者およびカウンセリング実務士資格取得者数を表6に示した。「カウンセリング実習」のうち1週間の学外実習は、2013年度までは「幼稚園におけるカウンセリング実習」として大学キャンパス内にある幼稚園で行ったが、2014年度以降は、「福祉施設等におけるカウンセリング実習」として多機能型事業所（就労継続支援B型、生活介護）において実施した。この「福祉施設等におけるカウンセリング実習」は4年次の9月に5日間、4、5人程度のグループに分かれて実施しており、実習時間は5日間（1日8時間、計40時間）である。実習内容は①施設利用者と一緒に作業を行うことで、対象者を理解する、②相談実践活動の見学、陪席、講話等により、相談活動におけるカウンセリング・マインドの重要性と、実際の支援の在り方を学習する、③毎日質疑応答の時間を持ち、施設職員の指導を受ける、④実習最終日にレポートを提出するであった。「カウンセリング実習」のうち学内実習は、「ピア・カウンセリング実習Ⅰ」と「ピア・カウンセリング実習Ⅱ」であり、本学独自のピア・サポート活動である「キャンパス・サポーター」の一環として行われた。「ピア・カウンセリング実習Ⅰ」では、入学式当日、新入生と保護者を対象とした相談活動（1日4時間）とオリエンテーション期間中の昼休みに新入生と在學生を対象とした相談活動（1週間12時間）を実施した。「ピア・カウンセリング実習Ⅱ」は、「キャンパス・サポーター」一泊研修会におけるグループ・ワーク実習（1泊2日9時間）であった。これら学内実習の実践については、山下(2012)³⁾で紹介した。「カウンセリング実習」では、学内外の実習、各実習の事前・事後指導の他に、支援技能習得のための時間も設定した。その内容は、年度により異なり、ピアの観点から障害のある学生の支援のために、学内危険マップ、学内トイレマップの作成や、パソコンを利用した情報保障支援などであった。2016年度は、学内のほぼすべてのトイレについて実地調査を行い、

表1 「カウンセリング概論Ⅰ」のシラバス概要

授業担当者	岩村聡
授業形態	①講義（知識伝達） ②演習 ③実験・実習 ④ディスカッション、 ディベート A：グループワーク有り
授業目的	カウンセリングの本質は、「受容」にある。この授業では、様々な相談事例や教育実践例なども使いながら、カウンセリングについての基本的理解を持ってもらうとともに、受講者に「傾聴・受容力」や「あたたかい集団を育てる力」（そのために必要な「自己開示力」や「発表力」）など、日常の対人関係に役立つ力を伸ばしてもらうことを目標とする。
到達目標	①「カウンセリング」（グループ・カウンセリング含む）の基本的および詳細な特徴がより理解できるようになる。 Learning Effort 1 理解が不十分だが少しは前進したと評価できる。 Learning Effort 2 理解が普通に前進したと評価できる。 Learning Effort 3 理解がかなり前進したと評価できる。 Learning Effort 4 理解が最高に前進したと評価できる。 ②「傾聴・受容」がさらに上手にできるようになる。 Learning Effort 1 傾聴・受容力が不十分だが少しは前進したと評価できる。 Learning Effort 2 傾聴・受容力が普通に前進したと評価できる。 Learning Effort 3 傾聴・受容力がかなり前進したと評価できる。 Learning Effort 4 傾聴・受容力が最高に前進したと評価できる。 ③「自己開示」や「発表」などが、さらに上手にできるようになる。 Learning Effort 1 「自分の話」などを肯定的関心を持って聞く力が、不十分だが少しは前進したと評価できる。 Learning Effort 2 「自分の話」などを肯定的関心を持って聞く力が、普通に前進したと評価できる。 Learning Effort 3 「自分の話」などを肯定的関心を持って聞く力が、かなり前進したと評価できる。 Learning Effort 4 「自分の話」などを肯定的関心を持って聞く力が、最高に前進したと評価できる。
授業回数	90分授業15回
授業成果	カウンセリングがよく利用される専門領域や応用場面についての知識や理解を持ち、「傾聴・受容」「自己開示」「発表」などの力を身に付けることで、日常の対人関係で役に立つ。
成績評価の方法	講義や実習への参加態度（50%）、試験（50%）

表2 「カウンセリング概論Ⅱ」のシラバス概要

授業形態	①講義（知識伝達）④ディスカッション，ディベート A：グループワーク有り B：発表（プレゼンテーション）有り
授業目的	カウンセリングの対象となる心理的障害や問題を概観し，人間の心理的現象とところのメカニズムについて理解を深めると共に，家庭，学校，地域においてメンタルヘルスのためにどのような心理学的援助が適切であるかを検討することを目標とする。
到達目標	<p>①精神疾患に関する基礎的な知識を習得し，メンタルヘルスの重要性を説明することができる。</p> <p>Learning Effort 1 精神疾患に関する基礎的な精神医学的，心理学的理論を理解できた。</p> <p>Learning Effort 2 精神疾患に関する基礎的な理論を，口頭と文章で発表できた。</p> <p>Learning Effort 3 精神疾患についてグループで討論し，メンタルヘルスの重要性について，自分の意見を口頭と文章で発表できた。</p> <p>Learning Effort 4 精神疾患に関する基礎的な知識をもとに，メンタルヘルスの重要性について，文章で説明できた。</p> <p>②心理学的援助に関する基本的な理論を学習し，各援助方法の効用と限界について述べることができる。</p> <p>Learning Effort 1 心理学的援助に関する基本的な理論を理解できた。</p> <p>Learning Effort 2 各種心理学的援助方法の概要を口頭と文章で表現できた。</p> <p>Learning Effort 3 各援助方法の効用と限界について，グループで討論し，自分の意見を発表できた。</p> <p>Learning Effort 4 心理学的援助の基本的な理論をもとに，各援助方法の効用と限界について文章で説明できた。</p> <p>③今日の社会において必要とされているメンタルヘルスの取り組みについて，社会的問題との関連で考察することができる。</p> <p>Learning Effort 1 社会的問題としてメンタルヘルスの取り組みを考えることができた。</p> <p>Learning Effort 2 我が国におけるメンタルヘルスの取り組みについて調べ，口頭と文章で発表することができた。</p> <p>Learning Effort 3 グループワークを通して，現代社会の問題とメンタルヘルスの取り組みとの関連について考え，自分の意見を発表できた。</p> <p>Learning Effort 4 今日の社会で必要とされるメンタルヘルスの取り組みについて考察し，文章化できた。</p>
授業回数	90分授業15回
授業成果	カウンセリングの基本的な考え方を身に付けることができる。
成績評価の方法	テスト（40%），授業ノート（20%），討論・発表（40%）に基づき，総合的に評価する。

表3 「カウンセリング演習Ⅰ」のシラバス概要

授業形態	②演習 ④ディスカッション、ディベート A：グループワーク有り B：発表（プレゼンテーション）有り
授業目的	カウンセリング技法を中心として、ロールプレイなどの実習を通して、適切な応答の仕方を学習する。遊戯療法や、芸術療法、行動療法などについても取り上げ、様々な臨床心理学的援助方法について、理論を概観し、その実施方法について実践を通して学習する。また、それぞれの心理臨床実践例である事例を取り上げ、事例研究を行うことで必要とされる基本的な技能を習得することを目標とする。
到達目標	<p>①心理学をベースにした応答ができる。</p> <p>Learning Effort 1 クライエントの話を傾聴することができた。</p> <p>Learning Effort 2 クライエントの話を傾聴し、受容的態度で応答することができた。</p> <p>Learning Effort 3 クライエントの話を傾聴し、受容、共感的態度で応答することができた。</p> <p>Learning Effort 4 傾聴、受容、共感的態度で、心理学的理論に基づく対応をすることができた。</p> <p>②ケースの見立てができる。</p> <p>Learning Effort 1 逐語録を読んで、ケースの概要を理解することができた。</p> <p>Learning Effort 2 逐語録をもとに、ケースの概要についてグループで討論し、自分の意見を口頭で発表できた。</p> <p>Learning Effort 3 逐語録をもとに、ケースの概要を把握し、見立てを行い、口頭と文章で発表することができた。</p> <p>Learning Effort 4 逐語録や与えられた事例をもとに、ケースの見立てをし、文章化することができた。</p> <p>③事例に適切な臨床心理学的援助方法の選択を提案できる。</p> <p>Learning Effort 1 適切な臨床心理学的援助方法について理解することができた。</p> <p>Learning Effort 2 与えられた事例に適切な臨床心理学的援助方法について、グループで検討し、自分の意見を口頭で発表することができた。</p> <p>Learning Effort 3 与えられた事例に適切な臨床心理学的援助方法について、いくつかの選択肢をあげることができた。</p> <p>Learning Effort 4 事例に適切な臨床心理学的援助方法の選択を提案し、その理由を心理学的に説明することができた。</p>
授業回数	90分授業15回
授業成果	カウンセラーとして、基礎的な臨床心理学的知識を習得し、適切な心理学的対応ができる。
成績評価の方法	テスト（30%）、レポート（50%）、討論（20%）に基づいて、総合的に評価する。

表4 「カウンセリング演習Ⅱ」のシラバス概要

授業担当者	岩村聡
授業形態	①講義（知識伝達） ②演習 ③実験・実習 ④ディスカッション、 ディベート A：グループワーク有り
授業目的	この演習のテーマは「グループ・カウンセリング」であり、その代表的なものとして「エンカウンター・グループ」を取り上げる。受講者の「集団を見る目」や「ファシリテーターシップ」（率直で受容的な集団を育てる力）の発展を目指す。それは、1対1のカウンセリングやグループ・カウンセリングのカウンセラーにも必要な基本的能力であり、家庭や学校や職場など、日常の様々な集団に参加する際にも役立つ力となる。
到達目標	①「カウンセリング」（グループ・カウンセリング含む）の基本的および詳細な特徴がより理解できるようになる。 Learning Effort 1 理解が不十分だが少しは前進したと評価できる。 Learning Effort 2 理解が普通に前進したと評価できる。 Learning Effort 3 理解がかなり前進したと評価できる。 Learning Effort 4 理解が最高に前進したと評価できる。 ②「傾聴・受容」がさらに上手にできるようになる。 Learning Effort 1 傾聴・受容力が不十分だが少しは前進したと評価できる。 Learning Effort 2 傾聴・受容力が普通に前進したと評価できる。 Learning Effort 3 傾聴・受容力がかなり前進したと評価できる。 Learning Effort 4 傾聴・受容力が最高に前進したと評価できる。 ③「自己開示」や「発表」などが、さらに上手にできるようになる。 Learning Effort 1 自己開示や発表などの力が、不十分だが少しは前進したと評価できる。 Learning Effort 2 自己開示や発表などの力が、普通に前進したと評価できる。 Learning Effort 3 自己開示や発表などの力が、かなり前進したと評価できる。 Learning Effort 4 自己開示や発表などの力が、最高に前進したと評価できる。
授業回数	90分授業15回
授業成果	「集団を見る目」や「ファシリテーターシップ」など、カウンセラーに必要な基本的能力を身に付けることで、日常の様々な集団に参加する際に役立つ。
成績評価の方法	講義や実習への参加態度（50%）、試験（50%）

表5 「カウンセリング実習」のシラバス概要

授業形態	②演習 ③実験・実習 ④ディスカッション, ディベート A: グループワーク有り B: 発表 (プレゼンテーション) 有り
授業目的	大学学生相談室の活動や福祉施設等での実習を通して, カウンセリング・マインドやカウンセリング技能の向上を実践的に学習することを目的とする。
到達目標	<p>①対人援助の基本的な考え方を理解し, 積極的に対人援助を行うことができる。</p> <p>Learning Effort 1 対人援助の基本的な考え方を理解できた。</p> <p>Learning Effort 2 対人援助の基本的な考え方を理解し, 口頭と文章で説明できた。</p> <p>Learning Effort 3 対人援助の基本的な考え方に基づき, 計画に従い, 対人援助を行うことができた。</p> <p>Learning Effort 4 対人援助の基本的な考え方に基づき, 想定範囲外の場面においても積極的に対人援助を行うことができた。</p> <p>②対人援助の技法を習得し, 適切に使用できる。</p> <p>Learning Effort 1 対人援助の各種技法について理解できた。</p> <p>Learning Effort 2 対人援助の各種技法を習得しようと努力し, 自己トレーニングを実施できた。</p> <p>Learning Effort 3 対人援助の各種技法を習得し, 自身の支援レベルについて確認することができた。</p> <p>Learning Effort 4 対人援助の各種技法について, 適切な場面で自発的に使用することができた。</p> <p>③適切な支援のコーディネートをする事ができる。</p> <p>Learning Effort 1 支援のコーディネートの仕方について理解できた。</p> <p>Learning Effort 2 支援のコーディネートについて, グループで討論し, 自分の意見を発表できた。</p> <p>Learning Effort 3 支援のコーディネートについて, グループで話し合い, 支援計画を立て, 口頭と文章で説明することができた。</p> <p>Learning Effort 4 様々な場面を想定しながら, 適切な支援のコーディネートを計画し, 実行することができた。</p>
授業回数	90分授業12回 学内実習 1 週間20時間 学外実習 1 週間20時間
授業成果	カウンセリング技能が向上し, 日常生活における応用が可能となる。
成績評価の方法	レポート (40%), 討論 (10%), 実習 (40%), 学外実習先での評価 (10%) をもとに総合的に評価する。

表6 年度別カウンセリング実務士資格取得者数

年度	カウンセリング実習参加者数	資格認定者数	学部	学科	学外実習
2007	15	14	文	人間・社会文化	幼稚園
2008	10	8	文	人間・社会文化	幼稚園
2009	12	12	文	人間・社会文化	幼稚園
2010	30	30	文	幼児教育心理	幼稚園
2011	24	23	文	幼児教育心理	幼稚園
2012	23	23	文	幼児教育心理	幼稚園
2013	10	10	文	幼児教育心理	幼稚園
2014	23	23	文	幼児教育心理	福祉施設
2015	18	18	人間生活	幼児教育心理	福祉施設
2016	25	25	人間生活	幼児教育心理	福祉施設
2017	14	14	人間生活	幼児教育心理	福祉施設

写真付きのマップを作成した。その一部を、図1に示した。学内トイレマップや危険マップの作製を通して、学生は身近な環境における多様性について理解し、ユニバーサル・デザインの必要性に気づくことになった。理解の対象者として多様な人々を想定していることも、「カウンセリング実習」における特徴である。

このようなカウンセリング実務士資格科目の履修を通じて、学習目標の到達度を評価する方法として、各科目のルーブリック評価、成績評価、各科目履修後の授業アンケートを実施した。成績評価に関しては、「カウンセリング演習Ⅰ」「カウンセリング演習Ⅱ」が100点満点中70点以上、「カウンセリング実習」が80点以上の基準があり、表6に示したように、「カウンセリング実習」を履修した学生のほぼ全員が基準を満たし、資格を取得した。ただし、カウンセリング・マインドやカウンセリング技能の習得度の可視化が困難であることを考慮するならば、資格を取得した学生と、そもそも資格取得のための履修をしなかった学生との単純な比較はできず、学生の習得度の程度を測定する尺度の検討が必要であろう。

足立・岩崎(2010)⁴⁾は、大学における教師教育カリキュラムとして臨床・カウンセリング体験領域の授業実践を行い、学生の問題意識(目標)の達成度合いや変化を多面的に捉えることができるような測定法やツールの開発を試みている。足立らの対象とした授業は、「臨床カウンセリング・マインド=教師力」の育成を目的に形成された「個人(子ども・保護者)に対する支援を想定した実習(C系)」と「学級集団形成など集団における支援を想定した実習(G系)」であった。足立らによると、達成度合いや変化に関する評価視点は3つあり、体験学習での「体験レベル」の変化が学生の意識している「行動レベル」の変化に関係しているかを検討すること、体験学習での「体験レベル」の変化が学生の意識していない「自己イメージ」の全体的変化に関係しているかを検討すること、学生から見た授業評価である。各評価視点に対応する指

光風館 (1F~4F)

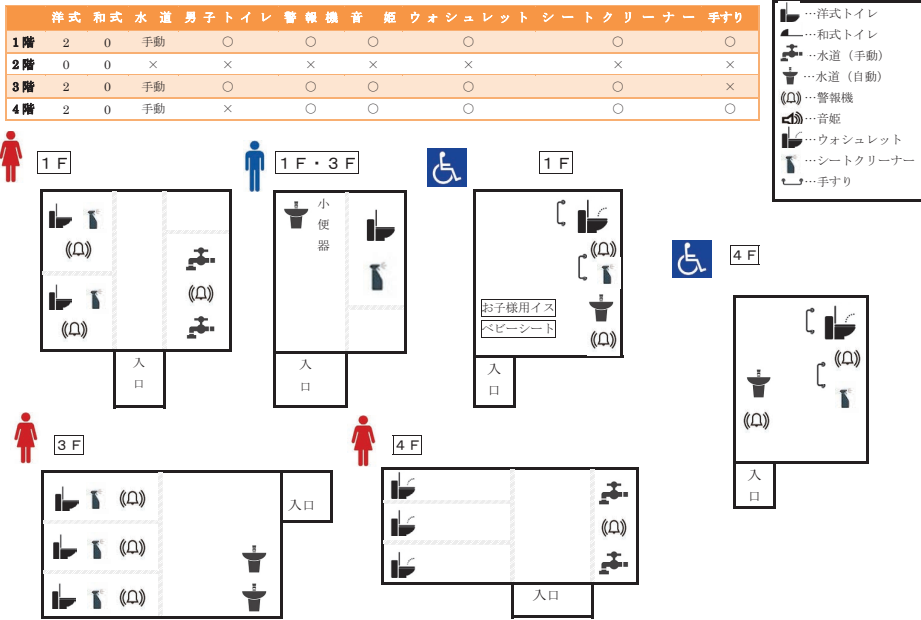


図1 2016年度「カウンセリング実習」履修者作成のトイレマップ (部分)

標として、足立らは「臨床カウンセリング・マインド行動チェック目録」の作成と実施、「バウムテスト」の利用、学生授業アンケートデータの質的分析を行った。

意識的行動レベルと無意識的自己イメージの変化を測定することで、学習目標の達成度を評価するという足立らの手法は、コミュニケーション能力の評価において参考となると考えられるが、意識的、無意識的側面に加え、客観的指標の導入が必要となるとも考えられる。すなわち、実際にコミュニケーション場面で適切に対処することができるかどうかという観点である。

本学におけるカウンセリング実務士資格取得科目によるカウンセリング・マインドの育成については、開始当時の心理学系科目の履修学生のためのカリキュラムであり、幼児教育心理学科においても、保育者養成におけるカウンセリング・マインドの育成を目指すというよりは、保育職を含める対人援助職に就く学生のための育成というスタンスであった。今回の改組にあたり、保育者・教育者養成に特化した学科カリキュラム編成となり、心理学系科目の大幅な削減を実施したことで、新カリキュラムにおいては、保育者養成におけるカウンセリング・マインドの育成を狙いとしている。このことは、「カウンセリング実習」で行っていたピア・サポート等は周縁的な位置付けになり、他者理解の対象者は子どもやその保護者に焦点を当てた、より狙いを絞ったプログラム編成が必要となることを意味していると考えられる。

3. 保育者養成課程におけるカウンセリング・マインドの育成

保育者養成課程において、カウンセリングに関わる科目の開設はどのような状況にあるのだろうか。約10年前のデータであるが、北野(2009)⁵⁾がインターネットを利用して保育士養成コース540件(2006年4月時点)を対象に、養成コースの種類、シラバス、取得可能な資格、養成者について調査を行っている。北野によると、保育の質の向上として、保育領域に、ケア、教育、子育て支援の機能が期待されていることから、シラバスをもとにケアについて臨床・カウンセリング等に関わる科目数、教育について保育所・幼稚園・小学校の連携に関わる科目数、子育て支援について家庭・家族・子育て支援に関わる科目数を調べた。その結果、臨床・カウンセリングに関わる科目は充実しているが、それと比べて、保育所・幼稚園・小学校の連携に関わる科目や、家庭・家族・子育て支援に関わる科目が少なく、今後充実させる必要があることが明らかになった。

北野による調査結果同様、本学においても、保幼小の連携や子育て支援に関わる科目に比べ、臨床・カウンセリングに関わる科目が充実していたが、改組を機に科目数が大幅に減少した。カウンセリング・マインドの習得については、科目の充実はもちろんのこと教育システムとして提供されることが必要である。例えば、相模(2009)⁶⁾は教育学部におけるカウンセリング・

マインドを持った教師を育成するための教育システムを紹介している。そこでは、1年次から4年次まで臨床心理学系の科目が授業として開講され、同時に1年次から地域における教育実践活動を行なうことができるプログラムとなっている。本学においても3年間かけてカウンセリング・マインドの習得を目標としていたが、改組後のカリキュラムで実践可能なことはどのようなことであろうか。そこで他大学における保育者養成課程におけるカウンセリング・マインドの育成に関する研究を紹介する。

藤井(2011)⁷⁾は、幼稚園教諭免許取得科目である「保育カウンセリング」の授業において、カウンセリング・マインドを理解し習得することをねらって、事例を教材として導入している。藤井は、保育記録、ロールプレイ、絵本、保育場面の映像の4種類の方法を挙げ、保育記録から事例の場면을想定したり、ロールプレイで事例に書かれた場면을想定することが難しい学生に対して、絵本を導入することで理解が容易になることを指摘している。本学においても、臨床心理学系の科目で教材として絵本を導入することはこれまでも実践してきたが、カウンセリング関連の科目で取り扱うことはほとんどなかったと言える。カウンセリング・マインドを習得することは、「傾聴」「受容」「共感」の態度を身に付け、他者と円滑なコミュニケーションができることを指すと考えられることから、保育者養成課程の様々な科目の中で実践される必要がある。絵本を教材として使用することは多くの科目で行われていると想定されることから、保育者養成のための系統的なカリキュラム体系になっているか、今一度カリキュラムツリーやカリキュラムマップで可視化しておくことが必要であろう。

瀬々倉(2018)⁸⁾は、保育者養成において、乳幼児期の子どもと言語的・非言語的コミュニケーションを交わすための素地を育成するために、深いコミュニケーションや自己洞察の体験過程を提供することが重要であるとして、「コミュニケーション・ワーク」を取り入れた授業(演習)を実施している。瀬々倉の言う「コミュニケーション・ワーク」とは、ファンタジーグループのフィンガー・ペインティングや、エンカウンター・グループを参考にしたワークや、ロール・プレイイング、絵本を活用したワークから構成されている。このうち、絵本を活用したワークで、瀬々倉は、同じテーマであるが表現様式の異なる2冊の絵本を題材とし、学生自身がどのように感じるかを話し合い、園児に対する活用の仕方をロール・プレイイングしたり、傾聴のワークで自分の気持ちを表現する手掛かりとして絵本を活用した。瀬々倉のコミュニケーション・ワークは乳幼児期の子どもとのコミュニケーション能力の育成を狙いとしており、ここでも絵本が活用されている。

保育者養成の到達目標のひとつとして、コミュニケーション能力や、カウンセリング・マインドの習得を挙げるとき、絵本に着目することは、臨床心理学やカウンセリングに関わる科目数の減少への対応策となるのではなかろうか。子どものことばや社会性の発達、遊びだけでな

く、子育て支援においても絵本は重要な材料となると考えられることから、積極的に取り上げたい教材の一つである。

4. 文部科学省幼稚園教育要領にみるコミュニケーション能力の育成

文部科学省⁹⁾は、幼稚園教育要領（平成29年3月31日文部科学省告示第62号）で、幼稚園教育において育みたい資質・能力として、幼児期の特性を踏まえ、次のように3つの柱を整理した。『①豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」②気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」③心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等』。(p. 8)これらは、個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、一体的に育てていくことが重要としている。また、言語活動の充実など指導計画の作成上の留意事項の充実としては、主体的・対話的で深い学び、言語活動の充実、見通しや振り返り、情報機器の活用を挙げている。

前(2018)¹⁰⁾は、幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容を、「よむ」「きく」との関連性において整理を試みている。前は、人工知能(AI)と人間の相克の時代に「言葉の力」を育むことの重要性を指摘し、特に幼児期における「よみ」「きく」の経験が、領域「言葉」に含まれる重要な概念となると述べている。伊崎(2018)¹⁾も、幼稚園教育要領の領域「言葉」「表現」をとりあげ、子どもの言語発達と思考力の育成に言及し、単純に絵本の読み聞かせの量を増やせばよいというものではないと指摘している。そして、言葉そのものに対する興味を促し、言葉の感覚を豊かにするためには、幼児教育に携わる教員が絵本・物語を保育環境構成として具体化できることが要求されていると述べる。

文部科学省⁹⁾によると、領域「言葉」において充実した内容としては、次の2点であった。「1 狙い(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」「3 内容の取扱い(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」(下線部：主な改訂箇所) (p. 22)

前や伊崎の指摘するように、幼稚園教育要領の領域「言葉」では、言葉の力を育み、言葉を用いて他者とのコミュニケーションを楽しむことなどを充実させたと言えるだろう。こうした幼児の言葉の世界を豊かに育むことにおいて、絵本が重要な役割を担っていると考えられる。

文部科学省⁹⁾は、5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿を10の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化しており、その中の一つに「言葉による伝え合い」がある。コミュニケーション能力の育成は、今日の大学生にとっても重要な課題であり、幼児期からの豊かな言葉の体験を通して醸成されるものといえよう。特に保育専門職のような対人援助職に就く学生にとって、カウンセリング・マインドを持って他者とコミュニケーションのできる能力が要求される。さらに保育専門職としては、自身が絵本を通じて豊かな言葉の世界を構築することで、「環境を通しての教育」を実践できると考えられる。

5. 保育者養成における絵本の位置づけ

幼稚園教育要領の領域「言葉」において、絵本と物語の重要性が指摘されていることはすでに述べた。保育現場ではその重要性は十分認識されていると言えるのだろうか。浅木(2015)¹¹⁾は、幼児教育・保育の質のうち、「過程（プロセス）の質」を左右する物的環境として幼児に身近な児童文化財の絵本に焦点を当て、調査を行っている。調査実施年は、2013年と2014年であった。大学生女子220名（4年制大学生89名、短期大学生131名）を対象とし、1950年代から1970年代に出版されたロングセラー絵本51冊に対する読書体験を尋ねた。その結果、90%以上の学生が読んでいた絵本は3冊、50%以上の絵本は11冊であり、残りの37冊が50%以下であった。また、浅木は、保育現場の保育士206名を対象に、同様のロングセラー絵本51冊に対する読書体験に関する調査を行った。その結果、90%以上の保育士が読んでいた絵本は5冊、50%以上の絵本は13冊であり、学生の結果と同様に、読書体験が低いことが示された。読書体験の少なさは、絵本の重要性についての認識も低いのではないかと危惧される。埋橋(2017)¹²⁾は、2016年に保育の質測定尺度である ECERS-3 を用いて、幼稚園、幼保連携型認定こども園の6園を対象に評価観察を行っている。標本数が少ないなどの限界があることを前提に、埋橋は、サブスケール「言葉と文字」で教師自身の語彙が必ずしも豊かとはいえないこと、教師によっては絵本の重要性が認識されていないことを報告している。保育者養成において、絵本の重要性を認識し、カリキュラムの中で絵本を教材として扱う科目を増やすことなど、絵本に対する学生の関心を高めることから始める必要があると思われる。

幼稚園教育要領の領域「言葉」では、絵本だけでなく物語も同時に挙げられており、語ることの重要性も示唆されている。辻(2013)¹³⁾は、養育者による絵本のナラティブの言語的評価方略に注目し、大学生女子86名(心理学専攻48名と幼児教育学専攻38名)を対象に、学問専攻領域によるナラティブ方略の比較を試みている。辻によると、字のない絵本を題材として、各専攻グループの学生に、子どもに読み聞かせることを意識して話を作り、記述するように求めた。

この記述されたナラティブを評価方略カテゴリーを用いてコーディングし、専攻グループ間で比較したところ、基本的な語りの量や評価方略の使用頻度に差はなく、幼児教育学専攻グループが擬音語・擬態語の使用頻度割合が高く、心理学専攻グループでは因果関係や心的状態語の使用頻度割合が高くなっていた。このことから、辻は、幼児教育学専攻グループでは、幼児教育保育に関する専門的知識やスキルの習得を通して、子ども像が明確にあるのではないかと仮定できると述べる一方で、登場人物の心的状態に言及し、因果関係について説明する傾向が子どもの認知能力の発達に寄与するという先行研究結果を考慮するならば、より具体的な子どもイメージを持つことが「心的状態」「因果関係」の評価方略を用いようとする傾向に有利に働いているわけではないことは大きな意味があると指摘している。すなわち、子どもの注意を喚起する重要な機能を持つ「擬音・擬態語」だけでなく、できごとの説明や心的状態への言及を含めたナラティブのスタイルを意識することが必要ではないかと考察している。

保育者養成校において、絵本や物語を題材とし、物語するという活動は、演習方式の授業や実習、地域連携活動で実施されており、今日的な社会の要請に応じて子育て支援に関する実践活動の取組がなされる中で、絵本を用いた実践例もある。例えば、本渡・林田・川合・若松・牟田口(2018)¹⁴⁾は、自治体と連携し、1歳半健康診査で「要経過観察」とされた幼児とその保護者を対象とした、学生が企画・運営する親子クラブの活動の現地報告をしている。本渡らによると、事前調査で言葉の発達に不安を抱いている保護者が多かったことから、活動に絵本の読みあいを取り入れ、学生ボランティアに対し、参加児の発する言葉や表情などの反応を受け止めながら、絵本を一緒に楽しむように指示したという。ここでは絵本の導入による言葉の発達促進をねらいとしていると考えられる。本学においても、新カリキュラムに「地域子育て支援セミナー」(3年次後期・2単位)を新設した。この授業の目的は、「地域の子育て中の親子(未就園児)を対象とした子育て広場の企画・運営を通して、子育て支援に必要な知識と技術を習得する」である。絵本を媒介とした言葉のやりとりや、親子に絵本に興味関心を持ってもらうような試みが想定される。

6. お わ り に

今日の保育者養成校には、カウンセリング・マインドを持ったコミュニケーション能力のある保育者を養成することが求められていると考えられる。それは、言葉を大切にする保育者ではないだろうか。文部科学省⁹⁾による幼稚園教育要領の総則の改訂のポイントとして、「言語活動などの充実を図るとともに、障害のある幼児や海外から帰国した幼児など特別な配慮を必要とする幼児への指導を充実。」(p. 6)とある。言葉の発達に課題のある幼児や、生活に必要な

日本語の習得に困難のある幼児も視野に入れた、言葉を用いたコミュニケーションにより心を通わせることをねらいとしていると考えられる。

本渡(2018)¹⁵⁾は、「不適切な養育」を受けた子どもに対する教育、言葉の指導の実態をもとに、乳幼児期の言葉の発達支援について、保育者が子どもの「感情を捉え表現する」ことは、愛着形成で重要であるという視座を得ている。保育者の子どもへの言葉かけは重要である。例えば、志澤・佐藤・磯野(2015)¹⁶⁾は、言葉かけの違いが幼児の動機づけに与える影響について調べ、3, 4歳児では言葉かけの違いによる影響はなく、5歳児において言葉かけの違いによる影響がみられたと述べている。

保育現場で子どもにどのように言葉をかけ、言葉を伝え合い、また子ども同士の言葉の伝え合いを支援していくかが、これからの保育者に求められると考えられる。本学の新カリキュラムにおいて、カウンセリング関連科目をはじめとする臨床心理学系の科目は削減されたが、保育に関わるあらゆる科目で、多様性の理解、傾聴、受容、共感など、豊かなコミュニケーションを育成する科目が用意されたと考えている。

謝 辞

授業科目「カウンセリング概論Ⅰ」「カウンセリング演習Ⅱ」を長年にわたりご指導いただいた岩村聰先生に心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 伊崎一夫 2018 乳幼児期の言語発達と思考力の育成 (1)―幼児教育の連続と発展―. 奈良学園大学紀要, **8**, 1-12.
- 2) 山下京子 2018 保育の質と保育者養成に関する研究. 広島女学院大学幼児教育心理学科研究紀要, **4**, 9-21.
- 3) 山下京子 2012 ピア・サポート活動を通してみた発達障害とその傾向のある学生に対する支援のあり方. 広島女学院大学論集, **62**, 11-24.
- 4) 足立智昭・岩崎貴雄 2010 臨床・カウンセリング体験領域における C 系 G 系の授業実践 (5)―プログラム提供による意識的行動変化と無意識的自己イメージ変化との関係―アンケートデータの数量化の試み (課題を持つことと試行することの意味)―. 島根大学教育臨床総合研究, **9**, 47-66.
- 5) 北野幸子 2009 ケア・教育・子育て支援を担う保育士養成の実態と課題. 社会福祉学, **50**, 1, 123-133.
- 6) 相模健人 2009 教育学部における学校カウンセリング分野教育に関する研究: カウンセリングマインドを持つ教員及びスクールカウンセラー養成のための教育システムの開発. 愛媛大学教育学部紀要, **56**, 85-90.
- 7) 藤井和枝 2011 「保育カウンセリング」についての一考察. 浦和大学・浦和大学短期大学部浦和論叢,

- 45, 71-80.
- 8) 瀬々倉玉奈 2018 保育者養成におけるコミュニケーション・ワークの導入. 京都女子大学発達教育学部紀要, **14**, 1, 143-152.
 - 9) 文部科学省 新幼稚園教育要領のポイント. (www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf)
 - 10) 前正七生 2018 幼稚園教育要領改訂における“ことば”の育ち—領域「言葉」の中のよむ・きくの射程—. 淑徳大学短期大学部研究紀要, **58**, 105-116.
 - 11) 浅木尚実 2015 幼児教育・保育の環境における質的向上への取り組み—ロングセラー絵本に関する読書経験調査と園文庫設置の提言—. 淑徳大学短期大学部研究紀要, **54**, 49-62.
 - 12) 埋橋玲子 2017 第2章第1節 ECERS-3 の紹介と実施結果. (国立教育政策研究所 2017 幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究報告書. 134-139.) (www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf)
 - 13) 辻弘美 2013 女子大学生による子どもに向けた絵本の「語り」—養育者の絵本の語りにおける評価方略の検討に向けて—. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, **3**, 55-61.
 - 14) 本渡葵・林田真志・川合紀宗・若松昭彦・牟田口辰巳 2018 地域子育て支援と大学の連携—親子クラブでのことばの発達支援—. 特別支援教育実践センター研究紀要, **16**, 37-41.
 - 15) 本渡葵 2018 乳幼児期のことばの発達支援に関する試論—児童心理治療施設併設校のカリキュラム分析を通して. 新見公立大学紀要, **38**, 2, 155-160.
 - 16) 志澤康弘・佐藤萌香・磯野真紀子 2015 ことばかけの違いが幼児の課題遂行量に与える効果の年齢ごとの検討. 平安女学院大学研究年報, **15**, 19-25.